

氏 名 多 田 伊 織

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第240号

学位授与の日付 平成9年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 日本霊異記の研究

論文審査委員 主 査 助 教 授 光田 和伸
教 授 山折 哲雄
教 授 鈴木 貞美
教 授 村井 康彦（龍谷大学）
教 授 小南 一郎（京都大学）

序章 『日本靈異記』という陥穽

「日本」と「景戒の立場」とはもつれ合いながら、『日本靈異記』の世界を形成している。この二つをもう一度洗いなおすことで、『日本靈異記』は読みかえられるのではないだろうか。

第一章 『日本靈異記』の時代

光仁・桓武兩朝の施策は、出家者たちの生活実態を無視して、厳密な律令体制への再編をもくろんだものである。そこには、出家者に許された特権を利用して、圧倒的な経済力をほこりつつあった、大寺や地方豪族層の創建した私寺への厳しい態度が見られる。ことに、桓武天皇は、原理原則を押し進めて、「正統な日本」の顕現を願う帝王であった。

第二章 桓武革命と『日本靈異記』の成立

ふるい地方制度と文化の崩壊、そして遷都による奈良の相対的地位の低下、これらが、景戒に『日本靈異記』編纂をもたらす大きな契機となっただろう。『日本靈異記』は危機の生んだ文学であり、また、古都飛鳥奈良が中心となってはぐくんだ「正統ならざる」佛教文化の記録である。

そして、『日本靈異記』の自土とは、大陸、半島からの渡来人の文化と日本固有の文化とが融合して形成した、自土であって、決して偏狭な日本ではないのだ。

自らが渡来人系の母を持つ桓武が、皇位につくことで、逆に正当なる日本を措定し、渡来人たちの出自を隠す方向へすすんだことは、景戒の自土を否定する行為だった。

これに危機感を持った景戒自身は、おそらく渡来人系にちかい出自であったと思われる。

第三章 海を渡る佛教～説話はどのように生まれ、つたわったか

佛教の説話文学は、インド固有の他の説話文学と交渉を持ちつつ、佛教世界でも独自の展開を遂げた。佛塔崇拜と本生譚の関わりを軸に、佛教遺跡の中でどのように口承文藝としての説話が發展していったかをみる。

また、説話がたりには、その初期から、在家信者が大きく関わっていた。その風潮は、中国にも及ぶ。

中国では、とくに梁代以降、佛教類書が数多く作られ、説話利用が容易になった。佛教類書は、『日本靈異記』にも利用されている。

第四章 唱導と佛教類書～中国梁から隋における佛教の口承文藝と説話集をめぐって

中国もまた、口承文藝が文学の一つの大きな潮流となった国である。口承文藝としてふるくからあるものが文学的に展開したものが漢代の辭賦である。辭賦は、その後も、雅俗両面

で發達し、敦煌文書にも、俗な形で賦が残されている。一方、後漢末から、講經が生まれ、それは佛教の説法とも合して、魏晉南北朝には清談、講經の發達を生み、佛教ではさらに唱導という形で口承文藝が生まれた。唱導は、後の敦煌變文の祖とも祖と考えられている。こうした雅俗合わせた中國の口承文藝の歴史を検討し、日本に移入された唱導などとの比較を試みたい。また、中國・日本での轉讀・唱導僧の出身地と階層を検討、唱導、轉讀をになったものはどのようなであったかを検討する。

そして、六朝期は類書が盛んにつくられた時代であり、これは口承文藝と無関係でなかったことをの作成あるいは書寫は平安初期の日本でも盛んであった。こうした類書・抄本は、ひとつには、口承文學の種本として使われたと考えられる。

第五章 法社から知識へ～民間佛教組織の日中比較

東晉以降、「法社」は中國で、邑などの小さな單位を基礎としながら、全土に廣がり、北朝では「造像知識」が結ばれた。そして、唐から五代までの敦煌では、「法社」は社會生活の基盤とも言えるほどの發達を見せた。『養老令』や『古記』の記述とを勘案すると、名前こそ「知識」と違え、日本にも敦煌と同様、そして中國本土と同様に、「法社」は存在し、在俗信者が私寺の管理運営に携わっていたのである。「知識」と名がかわったことには、朝鮮半島からの渡來人が大きな力を持っていただろう。すなわち、渡來人達は、故國の「知識」を日本にもちこんで、廣めたのだ。「知識」は東大寺の盧舍那佛知識という大きな花をさかせることになる。

そして、天平寫經の『法社經』は、「法社」の功德を佛陀に假託して説く疑經であった。『法社經』は地方にも廣まっていた私寺の知識運営のために求められたのではなかろうか。このほかにも『法社經』の名をもつ疑經があり、内題や別名から推して、『日本靈異記』の説話とつながり合う内容を持っていたらしい。すると、『日本靈異記』の私寺にまつわる説話の中には、いまは失われてしまった四本（もしくはそれ以上）の『法社經』が下敷きになったものがあったかもしれない。敦煌と日本の同時代の佛教徒は、この小さな散逸疑經『法社經』の調査からわかるように、かけ離れているというよりは、むしろよく似た側面をもっていたことが窺えるのである。

第六章 コラプションと原テキスト

仏教混淆漢語という視点から、『日本靈異記』を検討し、來迎院本を積極的に利用することで、コラプションを発見し、有効なテキストクリティックが行える。そして、テキストクリティックからは、失われた写本、『日本靈異記』成立の当時テキスト、さらには『日本靈異記』説話の原型となったテキストを想定できる。

外来の宗教仏教は、外来の言葉漢文で記され、読誦され、広められた。日本の漢文文化は

、平安初期、嵯峨天皇で頂点を迎える。ほぼ同じ時期に編纂された『靈異記』は、民衆仏教を漢文で記したが、その百年後の写本は、すでに純粋な漢文の形を失い始めていた。漢文で記されなくなった仏教説話は、日本にしっかりと根を下ろし、日本の文化と重合しながら、新たな展開をみせることになるのだ。その痕跡が、現在残る『日本靈異記』のコラプションに見えるのである。

終章 東アジアの中の『日本靈異記』

「自土奇事」を盛った『日本靈異記』は、同時代の東アジアの民間仏教の姿を残すすぐれたテキストである。

(うれ著大成、大う教よき
いら編ての求がい仏しはで
と願、い降追究との元点
くにつ以の研』国復視と
『たもにた係的記中をのこ
記つと格った閔史異・態自。る
異まと性が響教靈ド形独るす
靈はるのあ影宗『ン期とある
悪ですトきや・ろイ初力で整
善会証スで連的し、の想のに
報学検キが閔史むを集構も種
現連をテ。トの会、景話ない三
本國関程うるストの会、景話ない三
本の過いあキ学る色の本新れ下
日前立としてテク文ぐ特社会、のさ以下
『従成』究原話めの社しそ出、
は、の記研の説を究・に、見は
にげそ異のそ種物研的かてど点
式あ、靈起、各人本史らっん論
正りら本提はる諸て歴明あとの
(とか日題くするしのででは有
』を点『問多開すいでかは個
記学観びたの展場たまなるに
異文なよし究に登にるのれ究い
靈話新おと研後にれたれら研て
本説斬背景う』の話こい流み』れ
)日教た背よ記そ説。にのに記さ
果『仏ったれ異、のたる芸ろ異明
結、のか会入靈析々いたす文こ靈究
査は初な社を『分個て立承と』で
文最ののスののはめ成口るの究
論國と戒メ来程い占がやすで研
本がご景な從過るを品話とま本
わる者胆立あ半作説うれる。
對もさ容そ解た者
にら成変。つる著
期か形にたつ語編
換島が一らしして
軋半文化一証し合
の鮮文タた考む合
て朝のパも・、ま理うのす東らと平そ記迪
け・自のを較はしる。に管い嘗称ちか天は異を
大陸獨話化比りにい)をと經とわ唐たは者靈と
に大、説動をよりて院勳「院」なたせ」著『あ
安國てと流本る彫し寺活識寺社すま見社、の
平中し養に異あき定な教知る法。、を法。るし影響
らは合教容ので浮推的宗「よ」る達「るい討影
か色融の内トのをと私のくにれが発のこもい検・
良特が字・スもとうる寺づ」てら拡のこもい検・
奈の化漢式キのころす私と結び知にどにめて交
は代文に形テめたた対のも識おが土ほみに合せ
群時のもの』たつたにらに知にと全るなどねだ
話の有と芸記むああ寺れ力「会こがえちと重い
説こ個と文異読でで官こ済る社た社い。名をを
る、本内容承靈がの自(は経ゆのい法もる。態の
すが日受口『態も出寺にのわ國てるとい。の実者
場るとののは形つい私代せい中れす盤てその両
登い化教ど者本もかは時と。、わと基れに」の
にて文仏な著写をちにのクたとな礎のさ)識そ
』しの。導をの格に』こーいるこ基活に經知に
記示人る唱ス期性系記、ワてずおを生か偽「景
異開來あがセ初な人異がトル軋の位會ら(の背
靈を渡にれ口最的來靈るッらを管単社明」國く
本界たろそブ、本渡本くネと眼經ながて經がある
日世れこ、なしりが日てのがが院されつ写わてあ
『るさとじ難か語戒』出者式ろ寺小そよ法とれて
)すらた生復明の景)く信方こるのでに「」さの)
1応たれがのきめの2多俗營とよど煌料る社成る3
說明。こ用(さ
たに。ををン誦
れこたし本ヨ誦
さそつわ院シで
成であら迎フ形
形ってであ来うな
てがのでてこう
ったも一しるよ
よしつりとすの
に、もゴ主現ど
トがをテ、出が
クタ格力をにト
バし性う態本ス
ン介ない形写キ
イ紹的と期のテ
化的に動」初この
文さ流語最ちの
るをが渾トな、い、
よ説な混スすにいて
に仮と教キ。もししい
人のこ仏テるととで
來者の「』いとう想
渡著然記てるよ構と第
はう当者異みすめのこ、
』いは著靈試見とそう
記と語を本と発きはいま
異か言色日うをつ究と。
靈いる特『よ)を研のい
本ない特的らし形か本
日はて語か元變た、な
『でれ言点復的い上の
3話いの視て語て以創
独わまるつなまきい
の

うれ著大成、大う教よき
いら編ての求がい仏しはで
と願、い降追究との元点
くにつ以の研』国復視と
『たもにた係的記中をのこ
記つと格った閔史異・態自。る
異まと性が響教靈ド形独るす
靈はるのあ影宗『ン期とある
悪ですトきや・ろイ初力で整
善会証スで連的し、の想のに
報学検キが閔史むを集構も種
現連をテ。トの会、景話ない三
本國関程うるストの会、景話ない三
本の過いあキ学る色の本新れ下
日前立としてテク文ぐ特社会、のさ以下
『従成』究原話めの社しそ出、
は、の記研の説を究・に、見は
にげそ異のそ種物研的かてど点
式あ、靈起、各人本史らっん論
正りら本提はる諸て歴明あとの
(とか日題くするしのででは有
』を点『問多開すいでかは個
記学観びたの展場たまなるに
異文なよし究に登にるのれ究い
靈話新おと研後にれたれら研て
本説斬背景う』の話こい流み』れ
)日教た背よ記そ説。にのに記さ
果『仏ったれ異、のたる芸ろ異明
結、のか会入靈析々いたす文こ靈究
査は初な社を『分個て立承と』で
文最ののスののはめ成口るの究
論國と戒メ来程い占がやすで研
本がご景な從過るを品話とま本
わる者胆立あ半作説うれる。
對もさ容そ解た者
にら成変。つる著
期か形にたつ語編
換島が一らしして
軋半文化一証し合
の鮮文タた考む合
て朝のパも・、ま理うのす東らと平そ記迪
け・自のを較はしる。に管い嘗称ちか天は異を
大陸獨話化比りにい)をと經とわ唐たは者靈と
に大、説動をよりて院勳「院」なたせ」著『あ
安國てと流本る彫し寺活識寺社すま見社、の
平中し養に異あき定な教知る法。、を法。るし影響
らは合教容ので浮推的宗「よ」る達「るい討影
か色融の内トのをと私のくにれが発のこもい検・
良特が字・スもとうる寺づ」てら拡のこもい検・
奈の化漢式キのころす私と結び知にどにめて交
は代文に形テめたた対のも識おが土ほみに合せ
群時のもの』たつたにらに知にと全るなどねだ
話の有と芸記むああ寺れ力「会こがえちと重い
説こ個と文異読でで官こ済る社た社い。名をを
る、本内容承靈がの自(は経ゆのい法もる。態の
すが日受口『態も出寺にのわ國てるとい。の実者
場るとののは形つい私代せい中れす盤てその両
登い化教ど者本もかは時と。、わと基れに」の
にて文仏な著写をちにのクたとな礎のさ)識そ
』しの。導をの格に』こーいるこ基活に經知に
記示人る唱ス期性系記、ワてずおを生か偽「景
異開來あがセ初な人異がトル軋の位會ら(の背
靈を渡にれ口最的來靈るッらを管単社明」國く
本界たろそブ、本渡本くネと眼經ながて經がある
日世れこ、なしりが日てのがが院されつ写わてあ
『るさとじ難か語戒』出者式ろ寺小そよ法とれて
)すらた生復明の景)く信方こるのでに「」さの)
1応たれがのきめの2多俗營とよど煌料る社成る3
說明。こ用(さ
たに。ををン誦
れこたし本ヨ誦
さそつわ院シで
成であら迎フ形
形ってであ来うな
てがのでてこう
ったも一しるよ
よしつりとすの
に、もゴ主現ど
トがをテ、出が
クタ格力をにト
バし性う態本ス
ン介ない形写キ
イ紹的と期のテ
化的に動」初この
文さ流語最ちの
るをが渾トな、い、
よ説な混スすにいて
に仮と教キ。もししい
人のこ仏テるととで
來者の「』いとう想
渡著然記てるよ構と第
はう当者異みすめのこ、
』いは著靈試見とそう
記と語を本と発きはいま
異か言色日うをつ究と。
靈いる特『よ)を研のい
本ない特的らし形か本
日はて語か元變た、な
『でれ言点復的い上の
3話いの視て語て以創
独わまるつなまきい
の